
タナトアル異聞録 北槍のアルペイン

梢田 了

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タナトアル異聞録 北槍のアルベイン

【Nコード】

N7432J

【作者名】

梢田 了

【あらすじ】

光りに満ちた最後の大陸タナトアル。それらの半分を超える地域を支配し君臨する帝都。それより最北端、北門タンプリンへ一人の女が訪れた。しかしそこは許可証なくば通れぬ場所、女は無理に通過するもあえなく捕まってしまう。

しかしそれは、敵を唯一人の侵入も許したことのない北門を揺るがす大事件へと繋がった。

(前書き)

英雄が活躍します。
超人的な活躍です。
主役級だけが動く。
そんなお話ですが。

木の板に指先の触れる音が断続的に響く。それに多少苛立ち、その音を鳴らす者へ視線を向ける小柄な女。その視線を受けて、鎧姿の男は溜息をついた。

「溜息をつきたいのは、こっちだってのに」

柳眉を逆立てて唸る女の名はスティエラ・ソース。帝都サクアルの最北端に位置するこの場所、北門タン布林。スティエラは帝都へ向かうためにこの門を潜ろうとしたのだが許可証もなく帝都へ立ち入ることは許されないことだ。そのため今は屯所で男と話し合っている最中である。

正確には、もう話は終わっていたと言えようか。

「それで、なんだって帝都へ向かおうと思っっているんだ？」

「だから、それは言えないからとにかく通してって、そう言っているでしょう」

先ほどからこれの繰り返しである。男は苛立たしげに息を吐き、兜を剥いで頭をかいた。彼女は彼女で腕を組み、眉間にしわなどを寄せている。

もし、この女が商人などであれば、男は当たり前のように通行の手続きを行っていただろう。それはもちろん、帝都へ行けるかはともかくとしても、この北門から帝都へと続く道の町、北スマルマでは誰でも自由に商売を行う権利があるからだ。

しかしスティエラは商品らしきものなにも持ち合わせていないし、そもそも自分のことを商人などとすら言っていない。面倒にも程がある男は嘆く。

「とりあえず、なんだ。今から俺は仕事に戻るから、大人しく帰るかこの机にかじりつくか、好きなのを選んでくれよお嬢さん」

「お嬢さんじゃなくて、淑女よ、私は」

それは失礼しました、お嬢さん。

軽い仕返しのように鼻で笑って、男は席を立つ。ステイエラはそれを黙って見送り、自分の入った扉が男の退室と同時に閉まるのを確認して意地の悪い笑みを浮かべた。

通してくれないならば、勝手に通るだけのこと。

一人で嘯き、席を立つ。扉に耳を当てて足音が遠ざかるのを確認してから扉を開ける。石造りの廊下はここが北門の内部だと知らせてくれているようで小気味良い。

門は所詮、門である。ならばそれを越えさえすれば自分の行きたい場所なのだ。ステイエラは周囲を見回し、人気がないことを確かめて部屋の外へ出た。向かい側に設けられた穴を覗き、息を呑む。

予想以上に高い場所だ。それはもちろん、出入り口として設定されているわけではないから当たり前のことではあるのだが。ステイエラは自分の小さな体にこのときばかりは感謝して、穴に潜り込んだ。見下ろせば高く感じるが、再び穴からでて足から降りるかと後退する。

穴の縁へぶら下がれば、幾分か地面に近くなるかとステイエラが頬をかいたとき、廊下の奥から訝しげな声が聞こえた。先程の男が戻ってきたのだ。見れば湯気立つカップをふたつ持ち、中々に待遇してくれるような雰囲気だったが生憎とステイエラはそんなものに構う気はなかった。

悪戯っぽく晒って手を振ると、再び穴へ潜り込む。男の驚嘆する声が聞こえたが気にしてはいられない。靴の底が石を叩く音と鎧の騒々しく打ち合う音に焦りつつ、穴の外へ向かう。

ステイエラが穴の縁にぶら下がるのと、男の手が穴へと伸びたのは同時だった。無論、届くはずもなく、鎧のため、否、体格のためにその穴へ身を入れることもかなわない。

「冗談はよせ、許可なく立ち入れれば犯罪だぞ、わかってるのか」

「そつちこそ、冗談はよしてよ。ここまで来て、引き下がるはずもないでしょう！」

言って、手を離す。落下中は思わず自分の口から可愛らしい声が

漏れてステイエラは赤面したが、着地の衝撃に耐え切れず尻を打ち付けて無様な悲鳴をあげる。打ち付けた尻をさすって横を見やれば、目を丸くしてこちらを見る人の姿があった。

どれもが通交証を手に持つあたり、ここは北門タンプリンの出口、そのすぐ脇だということになる。頬を引きつらせた彼女に、鬼のような形相の門番が顔を覗かせた。

まだ陽も高い真昼から酒を呷る男が一人。グラスを傾けてうまいと唸り、黒く焼けた焦げ肉に手を出してはまたうまいと唸る。

おかわりとも言うように、空になった皿を差し出す男に店主である女は溜息をついた。

「いい加減にしなよ、アール。そろそろ戻らなくていいわけ？」

「いいんだよ。あいつらが勝手になんでもやってくれるさ」

短い髪を指で割り、アールと呼ばれた男はかぶりを振った。鎧を着てはいたが兜や足具など、胴体部分以外は全て外しており、自分の両隣の席に鎧を置いている。そのためただでさえ小さな店が、さらに狭く感じられた。

女は再び溜息をついて小皿に盛った、さらに焦げた肉を差し出す。それすらもうまいと言って食うのだから、女は堪らず口を開く。

「だから、いい加減におしよ。あんたがいると喧嘩ばかりで人の入りが悪いんだよ。とっとと帰んな」

「おいおい、客を差別するとは酷い店主もいたもんだな。ああ、それが俺だけってんなら、悪い気はしないがね」
減らず口を。

金も落とさない者など客ではないと断言する女に、アールは残飯を食わしてよく言えると、焦げた肉を頬張る。それすらも、ツケを払わないからだろうと嘲笑されるが。

舌打ちして空を見上げる。眩しく輝く太陽が、天幕の開いた小さな穴を無数に貫いていた。ここは道の町である。ちゃんとしたつく

りの店なんてものは、宿屋ぐらいのものだ。それ以外は楽に移動、撤収ができるよう、この広大な道にへばりつく木組みで天井を作ったぐらいの簡素な店しかない。振り向けばきつちりと列を成す人の群れ、北門から帝都へ向かう者と、帝都から北門へと向かう人の列である。

もつとも、それが確かに帝都へ向かうとも限らんがね。

一人、小さく言つて、思わず聞き返す女にはグラスを差し出す。女は多少、苛立つがすぐに肩の力を抜いた。確かに憎たらしい男だが、どうにも嫌いにはなれないのだ。

グラスを受け取ると、悲鳴が聞こえて女は外を見る。アールはどうでもよさそうに新しい酒をねだったが、騒々しい雰囲気仕事をしろと女が厳しい口調で言った。

「……………、わかった。わかりましたよ」

どうせ酔いの席での喧嘩だろう、不満を隠しもせず、そしてさして深くも考えずに鎧はそのまま、店の外へと出る。強い日差しとは違い涼しい風が通り抜けて、火照った体に心地よい。

声のした方へと目を向けると、その場所を気にしながらも足を止めない人の群れ、そのひとつが悲鳴をあげて崩れ落ちる。風に舞い上がる、おそらくは商売で用いる品だろう、多くの布が飛び散った。その壁を抜けて、体中に布を巻きつけた者が走り出る。

「ああ、その心お優しき人！　どうか私を追うあの欲に目が眩んだ悪しき者を成敗してください」

小柄な体に紛れもない女の声。アールは無言でその女を見過ごし、続いて布の群れから姿を現した鎧姿に目を向ける。

その者は重い鎧を引きずるように息も荒く、女を指差してアールに言葉を投げる。

「あ、ああ、ちょうど、よいところに……………！　ど、どうかあいつを

みなまで言うこともできず、駆ける者をアールは弾き飛ばした。為す術もなく地面に転がった、おそらくは北門を守る番兵へ馬乗り

になり、その兜を殴り続ける。

連打に次ぐ連打で、非難の言葉もそこに鎧姿は黙り込んだ。アールが雄叫びをあげて勝利を彩るように拳を掲げると、町行く者の幾らかはアールを祝福するように手を打ち合わせた。半分は好奇に目を光らせて、もう半分は苦笑と冷たい眼差しながら。

それでも気分を良くしながら、布を剥ぐ女のもとにアールは駆け寄った。

「ご無事でしょうか、レディ？ 悪しき者はこの私めが……」

傳くアールに、女 ステイエラはいかにも上品な挨拶で謝辞を述べた。が、アールはその顔を見上げて呆けたように口を開く。続いて、なんだ子供かとあからさまに落胆して見せた。

「まったく、殴り損だ。おい起きろ、又アン」

あまりの言葉にステイエラが口元を引きつらせる。それに構うことなく、先程、自分で殴り倒した者を助け起こした。

ならばこっちは殴られ損ですか、救いのない。

皮肉っぽく呻くと、再び拳骨が又アンを黙らせる。振り向けば肩を揺らす女が一人。アールと又アンが左右に並び、ステイエラに向かう。彼女は彼女で、こちらの動きを制止させるように手を突き出しながら口を開いた。

「私はどうしても帝都に行かないといけないの。だから、もし見逃してくれるなら、それどころか、そう、協力してくれるなら報酬を渡すわ」

莫大な額よ、そう言ったステイエラにアールはない胸を張るなど呆れたように言う。

失敬な男だと唸るが、すぐに片腕を捻り上げられて悲鳴をあげた。「俺は女子供相手に手荒なまねはしたくはない、とつと自分の家に帰れよな」

「い、痛いッ。十分に手荒じゃないの」

そっちがその気ならば容赦はしない。

ステイエラは不適に晒って足を振り上げた。振り上げた先がアール

ルの股間を襲い、今度は彼が悲鳴をあげた。

なんてことをしてくれるんだと股を押さえ蹲るアールへ、又アンが驚嘆してその名を呼ぶ。それを聞いたステイエラは逃げることも忘れて、呆けたように蹲る男を見下ろした。

「え……今、なんて……団長？ あんたが？」

「ぐうう……そ、そうだ。この俺こそが北門タンブリン並びに北スマルマ路街護衛の任に就く」

痛みを堪え、涙目ながら立ち上がる。内股気味ながらも背筋を伸ばし、胸を張る。

北槍の騎士、アルフォード・アルベインだ。

格好をつけて言い切ったアール、否、アルフォードにステイエラはよろめいた。

「う、嘘でしょう。あの高名な“北槍のアルベイン”が、あんただって言うの？」

思い描いていた像とは似ても似つかないその姿に失笑する。アルフォードはそんな彼女を見て、これだから子供には男の渋さがわからないのだと嘆息した。

そのまま動きを止めているステイエラを確保し、又アンはアルフォードに鎧はきちんと着込むように言った。だがそれには肩を竦めるだけだ。偉そうに仁王立ちしてはいるが、一步も動こうとしないあたりまだ痛むのだろう、又アンはそれを放りステイエラを連れて屯所へ戻ろうとする。

「まあ待てよ、又アン」

アルフォードはその肩に手を置いて、その動きを阻む。こんな子供にも、団長の悪い癖がと嘆く又アンを小突き、アルフォードは彼女を見下ろした。

そもそも、なぜ彼女が追いかけられているのか、その理由すらアルフォードは知らないのだ。もちろん、理由など限られてはいるが。「帝都へ向かうと言ったな、ええと……」

ステイエラ・ソースよ。

言葉に詰まったアルフォード、そんな彼に突破口を見出したようにステイエラは目を輝かせた。アルフォードはその視線をひどく鬱陶しく感じていたが、それを口に出すことはなく、なぜ帝都へ向かうのかとステイエラに聞いた。

手続きを行えば一般市民でも帝都へ赴くことはできる。用件により滞在時間は定められるが、それをするのもなく帝都東西南北に振り分けられる門を抜けることは重罪だ。言葉を持たぬ犬猫ですらも、その雰囲気を感じて踵を返すこの門、それをあえて越えるこの女にアルフォードは関心を示したのだ。

思った通りに黙り込むステイエラに、アルフォードはなぜ手続きぐらい済ませられなかったのかと問う。面倒ではあるだろうがこちらのほうが確実であるし、帝都周辺ならばどの町でも行えることだ。それをしないということが彼には理解できなかった。

「……時間が、なかったのよ……」
「時間？」

「ええ。私、狙われてるの。だからどうしても、早く帝都に向かわなければならぬの」

できれば高名な北槍のアルベインに護衛を頼みたかったところだけだ。

皮肉たつぷりの顔から、その爪先までゆっくりと視線を巡らせて、アルフォードは嘲笑した。

「残念だが護衛のつくような姫君は華のように可憐か、もしくは涎も垂れるような体つきだと決まってるのさ」

柳眉を逆立てたステイエラに、アルフォードは生真面目な顔をした。急に表情が変わるものだからステイエラは驚いていたが、それは意に介さず、彼は質問を投げる。まさかお前、帝都の密偵かと、そう聞くのだ。確かにそれなら狙われていることも頷ける。

しかしアルフォードは、顔を輝かせて首を縦に振ったステイエラに吹き出し、豪快に笑った。

「お前、面白いな」

面食らう彼女に向けて、彼は密偵が自分を密偵だと、認めるはずもないだろうと告げてさらに笑った。赤面するスティエラの頭に手を置いて、アルフォードは又アンに屯所の個室に閉じ込めておくように命じた。

例え門を越えたと言っても、実質的な被害と言えば布を飛ばされた商人ぐらいだろう。それならば頭を下げさえすれば済む話、わざわざ罪人を増やすこともない。

アルフォードは一日ほど閉じ込めておけば、彼女も少しは反省するだろうと思つたのだ。町の規律を守る者としては愚かとも呼べるほどに良心的な言葉であつた。それに応えてスティエラを引きずる又アン。しかし彼女はそれに逆らい、アルフォードを睨みつけた。

「天帝に祝福された者、北槍騎士アルフォード・アルベイン……！ 予言するわ。あなたは必ず私を解放するよ、今夜ね」

その目があまりにも恐ろしく歪められ、低い声に又アンは喉を鳴らした。しかしアルフォードはそれを真っ向から見据えていたが、鼻で笑うだけだった。

先程とは打って変わって、しおれたように大人しく付き従うスティエラに、又アンはなにやら言い知れない不安を感じた。無駄口を叩くこともなく、兵士の寝泊りする部屋のひとつにスティエラを押し入れる。

もし、なにかあれば鳴らすようにと、部屋の扉に設けられた鐘を指す。しかしそれを見て、スティエラは不気味に笑うのだ。

「なにか、は必ず起きるわよ。だからこそ私は決して鳴らさない。けど多分、今夜で私は消えるでしょうね……あなたたちも」

今からでも用心することね。

そう言つて高らかに笑うスティエラに背筋を凍らせ、黙るように一喝する。彼女は顔を押し黙つたが顔の歪みは取れず、逆に不愉快だった。扉を閉めて外へ出た又アンが肩越しに振り返るが、とくに

変わった様子もない。

しかし不安は拭えず、足早にそこを離れた。その際、耳にまとわりつくような笑い声が聞こえたが、それは聞こえなかったことにした。

今日は早く、寝てしまおう。熱い湯を浴びれば疲れも失せてぐっすりだ。

又アンは鎧の留め金を外しながら自らの部屋へ向かう。自分の部屋とは言っても、北門の内部で割り当てられた場所だし、翌日には別の兵士が泊まる場所だ。元々は外敵を追い払うために備えられた砲台のある場所だが、サクアルが帝都として君臨した今日ではその面影もない。

重い鎧を両手に支え、華奢な体を現した又アンは足を止めた。そこにはある部屋の扉の前だった。中に納められているのは聖なる者として崇められる一族が献上した盾である。いつもなら気にもせずに通り過ぎるその場所からなにかを感じ取った又アンは鎧を通路に置き、油断なく腰に下げていた剣を引き抜いた。

ゆっくりと押し開いた扉の先で、又アンは大きく目を見開く。ここに納められていたはずの盾がないのだ。

慌てて見回した先で、壁によりかかるようにして立てられたそれを見つけ、思わず胸を撫で下ろす。おそらくは誰かの悪戯だろうと、又アンは剣を収めて盾の前へ立った。

それは正しく、巨大な盾であった。大人ほどの丈があるうか、もしこれが自分へ倒れこめば、おそらくはなす術もなく潰れるだろうと容易に連想させる。

又アンは半歩ほど下がり、押し潰されないようにと盾の横へと回った。こんな代物、持ち上げることもできまいが。

「やったとすれば団長か……罰当たりな。けど、まあ、私一人ではどうにもならん」

呟いて頭をかき、部屋の外へ向かう。扉を開いたとき、足元をなにかが駆け抜けたような気がしてぎょっとするが、視線の先にはな

にもない。

又アンは首を傾げながら扉を閉めた。

昼の騒ぎの後、店から追い出されたアルフォードは下宿先で暇を持て余していた。柔らかな寝台に炊かれたお香は高級なものだが、逆にそれが鬱陶しい。むしろ、北門のあの硬い石畳が恋しく感じる。そんなアルフォードが眠ることもできずにいたのは寝床のせいでも、ましてやおお香によるにおいの強さでもない。ステイエラの言葉によるものだ。

予言などと気味の悪い、なんて悪趣味な捨て台詞だ。

帝都に古く伝わる伝承を思い出し、かぶりを振る。伸びをして起き上がった彼は、衣服を着用していなかった。惜しげもなく裸体を曝しているのは、やはり一人しかいないという開放感からだろうか。鎧を着込んで眠る輩などはいないだろうが、アルフォードのように鎧を行き着けの店に全て置いている輩も見かけはしない。

ベッドの脇に投げ捨ててあった寝巻きを着込み、外へ出る。昼の熱気も薄れて涼しく、空には無数に煌く星々があった。

「……今夜は、やけに月がでかいな」

綺麗なもんだと溜息をつく。すべきこともなく、ただ静かな道の町を歩く。が、それは勘違いであったことをすぐに知らされることになる。

宿泊施設の立ち並ぶ細道から大通りへと出たとき、ようやく異変に気づいたのだ。その異変があまりにも大きく、尋常ではなかった。それは誰が見てもわかること

「タンプリングが……、燃えてる……！」

すでに何人かの野次馬が、彼のように大通りへと出てそれを遠くから窺っている。音はない、ここまでは聞こえない。けれど、確実に燃えている。

見張りはなにをやっている。敵襲か、それとも事故か。消火活動

はどうした。

敵襲であれば音も聞こえようが。消火を行おうとあの火の勢いではどうにもなるまいが。やるべきことはまずひとつ。

「なにをしている、貴様ら！ 避難、退避！ 急げ！」

野次馬どもを蹴散らして北門タンプリンへと向かう。赤々と燃える北門であったが近づけばそれほど大きく燃えているわけではないことに気づく。油でも塗られたのか壁にも火が残り散っているが、見張りとして北門で寝泊りしている彼の部下は見当たらない。

これぐらいならば、今はともかく早期に行えば消火は間に合わないでもなかったはず。ともかくは中の確認だと熱気に包まれる北門へ飛び込む彼、その目に飛び込んできたのは死体であった。それが誰かもわからないほどに顔を削げ落とされている。

「……………」

アルフォードはそれを見て表情を消すと、骸となった部下の腰に差された剣を引き抜いた。抜くこともなく、このような死に様など、奇襲されたということだろうか。

目を細め、油断なく剣を構えたアルフォードは鎧姿ならずとも氣迫溢れる男へと変わっていた。昼間に女を口説いては酒に飲んだくれる姿とはまるで別物だ。足早に通路を抜けて、上へ上へと駆けるアルフォードだったが、怪しい者の姿は見かけることなく、ただ死体だけを確認していた。

その数は八。寝泊りする見張りの者は合計で十名であり、残る二人がどこかにいることになる。もしくはそれも、気づかれない場所で骸として転がっているのだ。

結局、生きた人間を見つけることもなく、アルフォードは北門の最上階へと上がった。北門の頂上である、外敵がこの門を登れぬよう備え付けられた礮や弓矢の類がまだ転がっている場所だ。その中央に一人、立ち尽くす者の姿が見えた。

抜き身の剣を持ちながらも、丸みを帯びた華奢な体つきに目を細め、それが彼の知る人物であると気づき、剣を収める。

「又アン、無事だったか。なにが起こった、他の者は？」

しかし細く震えるそれは応えず、振り向くことすらない。彼は訝しげにもう一度だけ名前を呼び、その肩に手を置いて振り向かせた。

同時に硬直する。又アンは焦点の定まらない目から血を流し、口の端から泡を吹き顔に恐怖を刻み込まれていた。戦慄く口は僅かながら息を漏らし、そこから小さな言葉が何度も零れ落ちていく。

「ごめんなさい。許してください。すみません。ごめんなさい。」

「又アン……？」

一体なにがあったのか、口を開いたアルフォードに剣が突き出される。咄嗟に身を逸らして致命傷を避けたものの、その切っ先は深く、アルフォードの左肩に埋まった。苦痛に顔を歪めると同時に又アンは彼の腹部を蹴り、同時に剣を引き抜いた。

なす術もなく転がったアルフォードは、あわや転落といったところで北門の縁にかじりつく。しかし、右腕の一本だけだ。長年使用されず、吹き曝しとなったそこは砂埃が溜まり、すぐにも滑り落ちそうになる手に祈りを込める。

それを見ながらも、又アンはアルフォードの上に立つ。両手に握り剣を振り上げたその様に、アルフォードは悪寒がした。

「お前がやったのか、この火も、俺の部下を殺したのも。なぜだ又アン、仲間だろう」

「……許して……こう、ス、するし……力……」

歪に傾ぐ又アンの頭部、振り下ろされた刃に名前とも雄叫びともつかない声を漏らしてアルフォードは手を離れた。刃を受ける前に落下し、下を見る。地面に近づくその速度に肝を冷やしなが、アルフォードは壁を両足で力強く蹴りつけて空中で回る。

わずかながら落下の勢いを削いだ彼はそのまま地面に叩きつけられた。あまりの痛みに言葉もないが、だからと言ってこのまま恋焦がれた石畳の上で寝ているわけにはいかない。

すでに北門へ集まり始めていた他の騎士は、我らが団長の登場に

目を丸くしている。呻くその姿に傷を負っていることによろやく気づき、医療兵を呼ぶ声がするがそれには構うなとアルフォードが声を張り上げる。

「敵襲ではない、北門タンプリンの消火活動を市民と協力して行え！ それから数名は中へ進み、おそらく身動きのできないガキを連れて来い。」

それ以外は誰であろうと気を抜くな。又アンは見かけ次第に殺せ」

低くした声に彼らも同様に隠せずにはいた。団長の命令は絶対であるが、又アンは団員、彼らの仲間だ。しかし寝巻き姿のアルフォードであったり、この北門の有様から見える状況に彼らは顔を苦々しく歪めた。

詳細を聞くこととする者はなく、彼らは素直にアルフォードの言葉に従ったのだ。

熱気の中、スティエラは狂ったように鐘を鳴らしていた。甲高い声で人を呼ぶその姿は、死にもの狂いとしか言い表せない。

格好をつけたはいいが、誰とて死にたくはないものだ。ましてや焼死などとまっぴらごめんだ。

彼女は自分の言葉など忘れて、火の見える穴に振り返った。このままではすぐにでも焼け死ぬのではないかと言う恐怖が彼女を貫く。火が穴を抜け、石造りの天井に黒い煤をつけたころ、もう終いかとへたり込みそうになったスティエラの耳に、石畳の廊下を走り抜ける足音が聞こえた。

彼女は喜び、ここだ、ここにいると鐘を鳴らし声を張り上げる。扉の隙間から覗けば、同じようにしてこちらを覗く目があった。その瞳の色に自分をここに閉じ込めた者だと判断して、こんな状況だというのに赤面してしまう。

しかし、つまらない誇りで死ぬ気など、彼女にはさらさらしないの

だ。素直に助けを請うと、その目が横へとずれた。呆けたように瞬くステイエラの瞳を、巨大な眼球が捉える。

「うっ……？」

仰け反ると同時に、扉が吹き飛んだ。降り注ぐ木の欠片から顔面を守るように突き出した両腕、それが傷つく痛みを耐えながら、正面を見据える。そこには、異形の姿があった。

巨大な双眸に四方へ裂けた口からは涎を垂らし、肌色の体は丸く針のような、昆虫のような足がその側面に張り付き体を持ち上げている。底部から伸びた尾の先には瘤があり、これが扉を崩したであろうことはすぐに知れた。

怪しく輝かせるその顔の隣には、もはや白目を剥いたヌアンの顔が張り付いていた。

「……あ、あんた、も……こいつに食われたのね……」

魔物め。

哀れみを覚えて唸ると、ヌアンの顔から悲鳴が漏れる。同時にそれは、泣き声とも笑い声ともつかない雄叫びをあげて、こちらに突っ込んできた。慌てて伏せたステイエラの頭上を飛び越えて岩壁に正面からぶち当たる魔物。

ステイエラは半分、腰を抜かしながら這うようにして部屋の外へ、その後は立ち上がって走り抜ける。その後ろで、通路を破壊しながら猛然と迫り来る魔物の気配を感じていた。

逃げる、逃げる、逃げる。

もはや笑い声しかあげないそれに恐怖を覚えながら、通路の突き当たりに設置された階段を見つけ、やっとの思いで転がり降りる。魔物は直進しか知らないのか、再び壁に顔をぶち当てて動きを止めた。その振動は凄まじく、北門の全てを揺らしたのではないかと感じられるほどだ。

ステイエラは転び、足を挫いたがそれを構うまでもなく走った。そんな泣き言でもして殺されれば意味がない、生き残ってから道端の草にでも虫にでも泣き言をしよう。

そんな彼女は前方をゆく数人の兵士を確認して動きを止めた。安堵から涙が零れ落ちる。

だが

「に、逃げて……！ あんたたちも食われるよッ」

こんな人数、その程度の剣、勝てるわけがない。

そう判断した彼女の忠告にも兵士たちは目を丸めるばかりで、兎にも角にも彼女こそが団長の言っていた人間だろうとステイエラを確保する。そのまま数名が連れて行こうとした矢先、階段を魔物が滑り降りてきた。

「なッ、なにい！」

剣を構えた兵士の一人に押し掛かり、その頭を噛み砕く。悲鳴をあげるまでもなく鮮血と噛み砕かれた肉、骨の欠片を散らすその姿に、全員に緊張が走る。

恐怖が背筋を凍らせて、ステイエラは終わりを予感した。
しかし。

「ムーチ、お嬢さんを連れて逃げる。残りは壁になるぞ」
了解だ。

兵士の一人の言葉に、全てが頷く。なにを言っているのかと、慌てるステイエラを担ぎ、ムーチと呼ばれた若者は仲間を放って戦線から退いた。目と鼻の先では仲間の死体を貪る魔物に剣を向ける男たちの姿がある。

「なにしてるの、早く逃げなさいよ！ 勝てないんだってば」

「わかってますよ、そんなこと。だから、俺らが盾になるんです」

「そ、そんなのって……ッ」

胸に回ったその手が締め付けられて、ステイエラは悲鳴をあげる。ムーチはそれに謝り、ただ前方を憎悪に塗れた顔で見ている。

許してくださいと、彼女に言う。

「正直なところ、私はあなたが憎い。もちろんそれ以前にあの化け物をもっと憎い。けれど、私たちはあなたを逃がすように団長から命令されたんだ、なんとしてもあなたを守らなければならぬ。

例え、仲間の死体を餌に時間を稼いででも」

ムーチの言葉に驚き、すでに小さくなった彼らの後姿を見た。ムーチはそれを気配で感じながらもう一度、許してくださいと小さく呟いた。

聞きながらも、これでは駄目なのだと首を振る。

「あれは……あれは、どんどん強くなるわ。人を食らって、どんどん大きくなる。勝てるわけない、戦っちゃあ駄目なのよ……」

北門を揺るがす音に、消火活動に勤しんでいた彼らは動きを止めた。それはアルフォードも例外ではない。比喻でなく、震える北門はその肌から大量の粉を吹き、今まさに打ち破られんとしているように見えた。

(いや、これは……破られる！)

怖気が走る。サクアルが帝都として君臨して四十もの年月が流れるが、未だ敵に攻められたことはおろか、この東西南北の門を破られたことは一度足りてない。

その門が今、崩れようとしているのだ。アルフォードは喉も裂けよと声を張り上げ、市民や騎士団の者たちへ退避を命じた。その言葉より数秒も待たずして、北門タンプリンの壁が弾け散った。

同時に飛び出してきた塊に目を疑う。その姿は帝都に献上される雄牛よりも遥かに大きく、比べ物にならない。そしてその姿形はまさしく異形、魔物であった。

「馬鹿な……こんな人の集まるところに魔物だと？ それもここには聖者より祝福されたものが安置されているんだぞ」

こんな奴が、一体どうして、今までどこに潜んでいたというのだ。剣を構えた先で、魔物は体を起こした。ごつごつとした岩壁をそのまま丸めたような体、甲虫を思わせる無数の足、それに支えられて巨人のような体が生えている。口は四方に裂けて、それは泣き声とも笑い声ともつかない雄叫びをあげた。

「黙れ魔物ツ！　ここより先は帝都である、貴様のような醜悪な化け物が来るべき場所ではないわア！

とつと頭を返して峙へ帰るか、さもなければ我が剣にその骸を曝すがいい！」

市民が一目散に逃げ出しても、他の団員がたたらを踏んでも、鎧すら着ていないこの男は自分の五倍はあるつかという背丈の化け物に自らの持つ剣を向けて、真っ向から啖呵を切った。

魔物はそれを見下ろし、短く息を吹く。続いて持ち上げたその巨木のような右腕に、来るかと剣を構え直したアルフォードに魔物は掌を向ける。そこに思わず顔を背けたくなるような、まるで地獄の釜の中のように、崩れた人間の顔が幾重にも張り付いていた。

呻き声を漏らすそれに苦々しく罵ると、魔物は自らの掌を掻き毟る。同時にあがった悲鳴と救いを求める声は正しく、人間のものだった。

「……………ご……ごこれは、ぎさまの、ぶかたぢのがおあ……………し、しくぶくされたもの、あるぶおおおど、あうべいん！」

「……………ッ！」
魔物が言葉を口にできるだと。それよりも、この不快な者は今、なんと吐き捨てたか。

思考が定まるよりも早く、魔物は開いた小さき地獄を握り締めて、アルフォード目がけて振り下ろした。自らの思考などどうでもよく、危険に対しては体が勝手に反応してくれる。

横転してその一撃をかわしたアルフォードは、奇声をあげてその巨大な腕へ刃を打ち落とす。しかし、鋼を思わせる音とともに火花が弾け、そのあまりの固さに全力で打ち込んだ手は痺れてしまった。こいつはまずい。

アルフォードは舌打ちして、奇妙な声をあげる魔物を見上げた。下ろした腕を振り上げてアルフォードを弾き飛ばす。咄嗟に差し出した剣にさしたる意味があるわけでもなく、いとも簡単に碎けて彼は宙を舞った。

周りにいた部下がそれを受け止めてくれたために大きな怪我はないが、又アンに貫かれた肩への痛みが一段と強くなる。

呆然とした面持ちで顔を上げれば、巨大な拳が北門タンブリンに打ち当てられたところだった。先程、振り上げた動作をそのままに打ちつけたのだろう、崩れた壁の一部をその顎で捉えて咀嚼する。

なんて化け物だ、そう呟いたのは彼か周りの人間か。

「……………撤退だ。後退する、態勢を立て直すぞ」

この程度の武器で勝てる相手ではない、判断を下したアルフォードは早々と退くことを命令する。しかし、それを聞いても中には弓に矢を番え、剣を槍をと構える者すらいる。戦う気だ。

アルフォードは彼らを罵倒するが、それでも退く気配は見られない。それどころか団長であるアルフォードの言葉を遮り、お前こそ鎧を着てきたらどうだと語気も強く罵った。

「私たちは生まれも騎士です、ここで退くわけにはいかない。もし、そんなことをすれば町にも被害が……………この悍ましい化け物の歯牙が市民にまで及ぶかも知れない。」

それをわかって退けと言われても、私たちは退けません」
力強い言葉に、アルフォードは押し黙った。彼は他の団員たちと違い、騎士の生まれではない。元々はただの傭兵であり、自分の命がありさえすればそれでいいと考えていた。事実、この魔物と相対した際に啖呵は切ったものの、彼の力で及ぶべくもないのならば、すぐにでも尻尾を巻くつもりだった。

しかし、彼らは違う。例えその矢が、剣が届かざるとも、その命を投げ捨てても戦おうと言うのだ。アルフォードにとってそれは理解できないことであったが、そこに騎士としての団員たちと、傭兵としてのアルフォードとの意識の差があるのだろう。

ならば、無理に理解する必要などない。

「俺は戻る。ここはもう戦場となった、戦化粧もしていない俺は退散する。だが、それを済ませれば駆けつけよう、すぐにだ！」

……………死ぬなどと言わん。だが、あいつに食われて死ぬんじゃない

ぞ、もしお前らの顔があいつのどこかにあれば、俺はそれを潰してやる」

アルフォードの言葉に苦笑して、団員たちは魔物へ向かった。魔物は不器用に人間を真似て嘲笑した。まるで大きさの違う人間が群れて迫るのは余程おかしかったのだろう。

打倒すべき武器もなく力もなく術もなく、それでも団員たちは強大な魔物へとその歩を進めたのだ。

痛む肩を押さえて駆けつけた酒屋は、すでに灯りをともし、天幕は片付けられた後ながらも店主はカウンターに頬杖をつきながらこちらを軽く睨みつけた。

「待っていたよ、もう来ないんじゃないかと思った」

女の言葉に不適に笑い、馬鹿を言うなとアルフォードは息を整えた。女はその言葉にもやれやれと肩を竦めるだけであったが、すぐに顔を引き締めると綺麗に鎧をたてかけた木製の台車を転がした。

彼の傷に眉を潜めながら、そんな体で戦えるのかと問う。息を整えたアルフォードはその言葉を鼻で笑い、もう一度同じ言葉を口にした。

「ならいいけど……おいで、着付けてあげる」

優雅に手招きされて、アルフォードは女の下へ向かった。女は唇を歪めて、どれだけ恐ろしいものを相手にしているんだかと、彼を嘲る。

あの猛る声はよく届く。女はそこに人外の化け物がいることは百も承知で、アルフォードが駆けつけるのを待っていたのだ。

「よく待っていてくれたよ、準備までしてくれて。お陰で血が止まる前に戻ることになりそうだ」

「馬鹿を言いなさんな、私はこれでも田舎育ちで、魔物なんて見慣れてんのさ」

こんぐらいの奴ならね。

そう言つて人差し指を立てる女にアルフォードは思わず笑う。留め金をされ、鎧を揺すりきちんと固定されているか確認して女は兜を手渡した。彼は受け取つた兜を頭に被り、女を見る。

もしもキスのひとつでもくれるんなら、あんな化け物に負けやしないがな。

豪快に笑うアルフォードに女は呆れたように馬鹿と一言。むしろ、打ち勝てるのであれば一晩ぐらいはとも寝てやろうと再び嘲て、もうひとつの台車を運んだ。

台車に乗っていたのは長大な槍だった。全てが真鍮製のその槍は鮮やかな色を月光に曝している。アルフォードはその槍を右手一本で持ち上げて、肩に乗せた。

「覚えておけよ、明日は、いや、今日中にも楽しませてもらうさ」
できるんならいつでもどうぞ。

妖しい笑みを浮かべて手を振つた女にこちらも手を振つて、踵を返す。正面を見た瞬間に、アルフォードは間の抜けた声をあげた。そこには下卑た笑みを浮かべてこちらを見る団員の姿があつたらだ。なぜここに居るのかと頭を抱えるアルフォードに、内の一人が言つ。

「別に、あつしらは騎士の生まれでもない、騎士道も知つたこつちやあない。ただ金のために命を賭ける臆病者さ。だから、準備はしつかりとこなさなくちゃあ」

言つて顎で指した先には、木組みの投石器と破城槌、そして大型の弩砲が並べられている。

これはまた、戦争でも始める気かと驚嘆するアルフォードに、戦場と言つたのは誰かと指摘される。

「そうさなあ……皆、聞いてくれ。俺は死にたくはないし、誰かのために犠牲になるだとか、戦場で命を捨てるのはただの馬鹿がすることだと思つている」

いや、思つていたと言ふべきか。

順繰り、団員たちを見やる。難しい表情を浮かべている者いれば、

童のように笑う者もいる。頑強な肉体の者もいれば老いて枯れ枝のような者もいる。

そして、生粋の騎士もいれば生粋の傭兵もいる。

「聞けよお前ら。俺は死ぬつもりはない、ましてや俺たちのため市民のため、その命を捨てる覚悟で戦っている俺の部下をみすみす、あんな化け物に食わせるつもりもない。

戦うぞ！ 弓を引け、剣を抜け、矛を磨け！ 構えろ！ 青臭いことを平気で言うような奴らに、俺らの戦いを見せてやるうじやないか！ そして勝とう、金のために、名誉のために、榮譽のために、女のために！

そうして俺たちもまた、生粋の騎士とやらになってやるうじやないか！」

歯を剥いて、犬の如く晒う。

士気も昂り雄叫びをあげる団員たち、その声を背に受けて、アルフォードは面甲を引き降ろした。始まりだと、体中を脈打つ血が歡喜に奮える。こつも勇み立つことはない、こつも荒ぶることはない。これが英雄のみが感じられる高揚なのだろうか、自問する。少なくとも帝都を治める天帝に戦場での功績を認められたときも、またこの北門の護衛につき、祝福として渡されたこの槍を受け取ったときも、これほどまでに昂ることはなかった。

感じることはただひとつ。今こそ、ようやく自らが英雄として、“北槍の騎士”という天帝より授かりしその名に恥じぬ器を持つたと、そう感じられることこそが。

「走れーッ。息をつく暇もなく、心の音を聞く暇もなく、仲間の下へー！」

仲間の下へ。

アルフォードの言葉を復唱し、団員が駆ける。引きずられていく攻城兵器を見つめ、彼もまた走り出した。雄叫びをあげて、月の祝福を受けて、アルフォードは道の町を駆け抜ける。

射られた矢はその肌に傷を与えることもなく、突き出された矛は跳ね返される。魔物は非力な人間を晒いながらも、苛立った雄叫びをあげる。

「ど、ごにいうう……！ あのおんなはどごらあア！」

その巨体に似合わず敏捷な動きで鎧姿に迫る。こちらの攻撃など効かない相手だ、いとも簡単に押し潰されてしまう。

魔物は猛り、唸り、その豪腕で触れるもの全てを潰していく。腕をなぎ払えば頭と言わず胴と言わず、人の体が千切れ飛び、歩くだけでその鋭い足先に貫かれるのだ。出で立ちも存在すらも、まるで違うように在る魔物を相手に、団員たちは声もなく散っていった。

だがそれでも退く者はいない。例え恐怖で足を止めようと、絶望にその切っ先を地に向けようと、彼らは背を向けようとはしない。愚直に自らの死と向き合うのだ。

「おつ、おまえあ……これいぞうぐつで、ぐつでもお……づよく、あ、ならん……」

魔物は力なく自分を見上げる者を掴みあげた。万力の如く締め上げて、その悲鳴を堪能する。やがてそれはすぐに限界を迎え、その者は魔物の手中に自らの全てを流し落とすのだ。

手中から滴り落ちる命に満足げに笑い、魔物が大きく口を開く。その口中を巨大な、鋼鉄の鍔が刺し貫く。魔物は初めて悲鳴をあげて、暴れた。刺し貫いたそれに、瞳から涙を零し口から呪詛を吐き、引き抜こうと悶える。しかしそれには返しがついているために中々抜けない。

怒りにその瞳を燃やし見回せば、遠方に先程まではなかった木組みの姿を認めて魔物は絶叫した。その声は道の町北スマルマを揺るがし簡素な建物を崩し落とす。北門すらも悲鳴をあげる中でアルフオードはそのふたつ名の由来でもある槍を魔物へ向けた。

「改めましてだな、魔物め。我こそは北門タンプリン、北スマルマ路街護衛の任に就き、貴様らの如き獣を討つ鉄の騎士団団長！ 北

槍の騎士、アルフォード・アルベインである。

今より貴様を貫いて、その反吐も出る醜悪な面を天帝への貢ぎものにしてくれるわ！」

「ご、むしが……がなる、な、よ……なあなき、むしげらあ……」
貴様と同じにするなよ、高名な我ら人を食らう名すらも持てない腐れ外道が。

アルフォードらの到着に歓喜して振り返った団員、その数はすでに僅かなもので彼は苦々しく顔を歪めた。今や体中に張り付いた顔から嘆きの言葉を漏らすこの魔物は、アルフォードをも一飲みにしようと迫り来る。

それを見てアルフォードは引くでもなく、槍を振り上げて合図を送る。同時に降り注ぐ鏃の雨嵐にその動きを止めて自らの腕を盾にする。巨木のごとき腕に突き刺さるが、まるで動じない魔物は腕を振り下ろし、砂塵を巻き上げた。

その衝撃に弾き飛ばされたアルフォードは地に転がり、睨みあげれば弩砲へ向かって猛然と突き進む魔物の姿。縦に連結された弩砲は連続して鏃を放つが、その肌を貫くのみで魔物は怯まず。

「破城槌ーッ！」

破壊されることは当に見越している。アルフォードの叫びに応えて、弩砲の影に置かれた破城槌が姿を現した。

魔物はそれに気づきはしたろうが、構うでもなく弩砲を破壊する。同時に射出された槌が、その甲虫のような足を襲う。丸い塊に生えた胴体、その腕よりもはるかに細いその足は容易く打ち砕けて、魔物は悲鳴をあげた。

破城槌は直後に破壊されるが、動きを止められれば上等だとアルフォードは口元を嫌味つたらしく歪めている。両腕でその巨体を支える魔物へ、四方八方から石が飛ばされる。木組みされた投石器で魔物を取り囲んでいたのだ。石だけではなく紐を利用した投石器を使い火炎瓶を投げつける者もいた。

もちろん、こんなもので魔物を仕留めようなどとは思っていない。

アルフォードは戦槌や戦斧を携えた団員とともに投石の合間を縫い、その足へ攻撃を加えた。節くれだつた間接部分は思いの外に脆く、赤黒い砂のようなものを吹き上げる。

「両側から狙え。足さえ落とせば木偶の坊だ」

後は崩れた頭に破城槌を撃ち込んでやる。

アルフォードの言葉を受けて、団員たちは次々と魔物の足に楔を打ち込む。

彼らの攻撃によりその足を数本落とされて、魔物は怒りに猛る。

振り払うその腕で団員たちをなぎ飛ばし、アルフォードは彼らの安否を気遣うこともなくその腕に駆け上がった。

「食われるなど言つたらうが、手間をかけさせやがる」

静かに呟き、嗚咽を漏らす肉塊へ槍を下ろす。貫かれたその場所からは鮮血が溢れ、槍を汚すが、彼は構うことなく、他の部分にもある肉塊を叩き潰した。

団長がいては投石できるはずもなく、攻撃の止まった中で魔物は自らの体を駆け回るアルフォードに狙いを定める。その大振りの腕をかわし、隙を見て彼は魔物の左目を貫いた。

同時に轟く獣の雄叫び、激しく身を揺らすその動きに耐え切れずにアルフォードは滑落しし、石畳に叩きつけられる。

呻くアルフォード、それを探すべく魔物は怒りのままに暴れ狂った。もはや役に立たぬ足などではなく、その腕で地を叩き、前進する。貫かれた目を押さえながら投石器を破壊する魔物に団員たちは浮き足立った。

「くそ……。慌てるな、あいつは片目なした。死角から矢を射て、あの開きっぱなしのだからしない顎に突き入れてやれ！」

アルフォードの言葉、それを聞いたのは魔物も同じでその歪な顎を閉じようと試みるが、先に突き刺さつた鋼鉄の鍔がその邪魔をする。

距離を離し、矢での攻撃へと切り替えた騎士団に魔物は唸り、石畳を砕いた。

虫けらめ、矮小な者どもめ。ただひとつもありはしない勝利を夢見るか弱き者め。果てる。

その言葉はさながら、絶望を告げる鐘の音だった。言葉と同時にその全身を隆起する。微細な震えとともにその身から突き出た肉の槍が、魔物の周囲へと打ち出された。それは家屋を打ち破り石畳さえ突き破り、まして、人の体など比べるべくもなく吹き散らされる。

一瞬にして大量の人間の命を奪った魔物に、距離からその攻撃に曝されることのなかったアルフォードは呆けたように口を開いていた。

化け物だ。これは正しく化け物だ。

思わず呻いて、力が抜ける。本当に勝てるのだろうか、このような者に。魔物が宣言したように、勝ち目などというものはありもしないのだろうか、そう思える。

矛先が下へと落ちたとき、アルフォードの左肩に痛みが走る。

「……なにをしている、なにを考えている。馬鹿か俺は、勝ち目なんてのは状況でどうにでもなるもんだろうが。用は勝ちさえすればいいんだ、負けられないのなら」

そして、勝ちを得ることで英雄となれる。

ならばどうする。自身に問う。あの強大な魔物をどうやって伐するか、あれほど強き者を。

思考する間にも、先程の攻撃で散り散りにされた団員が追い回される。アルフォードは策などはないのかと思わず苦笑した。仲間が怖い顔をした輩に追い回されて、静かに勝利のための案を練られるほどアルフォードは賢くないのだ。そしてそれは彼自身、とつくに理解していることだった。

真鍮製の槍を携えて立ち上がったアルフォードはしかし、すぐ背後に人の気配を感じて振り返る。そこには、崩れた店の中、膝を抱えて縮み震えるステイエラの姿があった。

「お前……無事だったのか」

アルフォードの言葉に、彼女は顔をあげた。その目は驚きと、そして恐怖に彩られている。その視線が示すのは彼を通り過ぎて遙かに遠く。

振り返ったその先で、魔物は潰された目をも大きく開き、湯気を口から立ち上らせる。その目は確かにこちらを捉えていた。否、正確には彼女、ステイエラ・ソースに向けられたものだった。

泣き声とも笑い声ともつかない遠吠えを魔物があげる。

「……あ、あんたのせいよ……見つかった……！」

「なに言ってる、そんな場所に逃げ込んで俺のせいもあるか」

「違う！ 誰も気にさえしなけりゃあ、あいつに見つかるはずもなかったのよ」

ステイエラの言葉にふと、彼女の足元を見れば綺麗な円が記されていた。そこらの石ころで描いたにおだろつ、ただそれだけの円。ただ見れば子供の落書き程度だろうそれは、現状もあいまってアルフォードには特別神聖なものに感じられた。

地響きに再び振り向けば、魔物が歓喜の声を沸かし迫る姿があった。アルフォードは這って逃げようとするステイエラの肩を引つ掴み、魔物の突進を転がりかわす。

起き上がった先で瓦礫に突っ込み、もがく魔物を見据える。アルフォードはステイエラを引きずり立たせた。

「お前か、元凶は。奴はお前を狙ってここに現れたんだな？」

怒気を隠そうともせず、犬歯を見せて彼は唸った。ステイエラはそれを見て喉を鳴らす、強気な態度は崩そうとしない。

アルフォードの言うことならば確かにその通り、元凶は自分だと言えるかも知れないと、そうステイエラは自らを指し示した。けれども現状を作り上げたのはアルフォード・アルベイン、貴様に他ならないと。

なにを言うかと睨み、顔のひとつやふたつ叩いてやるうかと意気込むが、それよりも先に魔物がこちらを向く。

「畜生め。おい、ステイエラ・ソース、お前は予言なんて偉そうな

ことができるんだらう、だったらあの化け物を殺す知恵を、この俺に授けて見せる！」

「殺す？ あれを殺すって？ 冗談じゃない！」

アルフォードの言葉に頓狂な声を上げるスティエラ。彼女は槍を構えるアルフォードに、逃げることでしかあの魔物から身を守る術はないのだと告げる。

「勝てっこない、見れば分かるでしょう。人とは違う、獣とも違う、あれは化け物、魔物なのよ。」

だから逃げましょう、追いつかれないように。どれだけ追いつて立ってられても、どれだけ攻められても、逃げさえすれば、追いつかれさえしなけりゃあ、こんなことにはならないのよ！」

断る。

力説するスティエラをにべもなく切り捨てて、向き直る魔物を正面から見据える。言葉に詰まる彼女に、アルフォードは続けた。

逃げてどうする。結局は追われるのだらう、それならば俺はここで敵を滅ぼす道を選ぶ。

「大体が、俺たちが準備を進めている間、他の市民を巻き添えにしないようにって奴に食われた奴らもいるんだ。そいつらの顔の貼りついたあの化け物を、討ち取ってくれると信じてくれたあいつらのためにも、許せるはずがないだらうが。逃げられるはずがないだらうが。踵を返せるはずがないだらうが」

例えそこが死地だとしても、仲間の用意してくれた墓所があれば、自分はそのへ赴くのだとアルフォードは息を吹く。その言葉は、スティエラの胸を抉った。自身の保身しか考えていなかった、考えられなかった彼女の中で、目の前で食われていった騎士たちの姿が浮かび上がるのだ。

その中には、たった一人しか残されていなくとも、自分を逃すために食われた者もいる。

(いいや、関係ない。私は、それにそれが騎士の務め、元々、私の忠告を受け入れてればこうはならなかったんだ。こうは……)

静かに後退する。その気配を感じても、アルフォードは振り返ることはない。恐ろしげな声を発する魔物を相手に、一歩も退こうとしないのだ。

なぜ逃げないのか。保身のために、自らのために。他者に束縛されて命を捨てるなど、馬鹿げたことだ。

ステイエラはそう思った。だがしかし、その馬鹿が今、目の前にいるのだ。勝ち目もない相手を見据え、臆病風に吹かれることもなく堂々とした佇まいである。自分こそが正しいのだと、腰も低く、足取りも揺れておぼつかない彼女とは、まるで正反対の姿だった。

(……私は……)

逃げるのか。逃げれるだろう、心の中で声がする。動きを止めた足を叱咤する心の声が。

再び足が動き出したとき、ステイエラとアルフォードの耳にはつきりと、救いを求める声が聞こえた。それはか細く、哀れで、その声はステイエラを揺さぶった。

かわして、とそう叫んでいた。気づけば走り出る魔物を相手に、アルフォードの隣に並び立つ。彼は口元を歪めて彼女を抱え、魔物の突撃をかわした。

「……突然、どういった風の吹き回しだ？」

「確かに、あなたの言う通りよ。だから私も戦う。勝てやしないかも知れないけど、例えば意味を成さないことだとしても」

ステイエラは自分に考えがあるとアルフォードの耳に口を寄せる。まずは奴が見せた肉の槍、あれを防ぐ手立てが必要だとしたのだ。彼はすぐに頷き、それならば心当たりが在ると笑みを見せる。

アルフォードは痛む肩にステイエラを乗せて、北門へ向かった。魔物が哄笑をあげて逃げるのかとこちらを挑発する。

「抜かすなよ魔物め。足も満足になく走れなければ、それほど俺の足が欲しいのならば譲ってやろうか」

大声で返し、挑発する。魔物は低く唸り、再び彼らに向かって走り出す。湯気立つ口に矢を射ち込まれて悲鳴を、そしてその動き

を止めた。

団員たちが大弓を携えて、団長であるアルフォードにここは任せると言い放つ。すでに満身創痍で、鎧が剥げれば力なく肩を落としている者もいたが、僅かな数ながらそれを言ってくれた団員たちに、アルフォードは力強く頷いた。

「死ぬな、死ぬなよ。もうこれ以上は死んだところで銅貨の一枚も墓には添えんぞ」

アルフォードの言葉に、それは死んでも死ねないなと笑う。

そう、ここからだ。肩にしがみつくと小さな体に期待する。ここからがようやく、勝ち目のある戦なのだ。心強い援軍があるのだ。団員たちが囿になってくれた間に今にも崩れ落ちそうな北門を駆け上がる。目指すは聖室、聖者より贈呈された盾の安置される場所だ。乱れる息もそのままに扉を蹴破り、中に入る。

アルフォードは部屋の中央に盾がないことに焦りを覚えるが、すぐに壁によりかかったそれを見つけて持ち上げる。

「よし、これでなんとか……ぐッ」

分厚き盾。まるで城壁のような見栄えに釣り合う重さは、怪我を負ったアルフォードの左肩を容赦なく責めた。

このような状態で盾を構えることができるのかと不安を覚えたスティエラに、大丈夫だとアルフォードは唸る。そうして盾を持ち上げて、なんとか見れるようになったとき、スティエラを見下ろした。「これで、後はどうする？ 奴の攻撃を凌げたとしても、それだけ

じゃあの化け物を殺せない」

「そうね……だから、あなたには無理をしてもらおうわ」

スティエラはアルフォードを見上げた。彼女はその盾を持ってあの魔物へ迫り、その丸い岩のような腹へ槍を突き刺して欲しいと頼んだ。

彼女の言葉に、思わずアルフォードは目を丸くする。刃も立たない体だ、それを相手に槍を突き通せと言うのか。それこそ、冗談など言っている場合でもないだろう。

しかしそれに対して、ステイエラは盾に触れるだけで主張を変え
るつもりはなかった。

「……祝福を受けた代物だったのね。道理で……これなら大丈夫よ」
そう言つて、アルフォードの支える盾の握りに自分もぶら下がっ
た。眉を潜める彼に、ステイエラはあの魔物に近づくことと、そし
て予先であの魔物を貫くことだけを考えてくれるよう、再び告げる。
後は、私が終わらせる。

なおも言い募ろうとするアルフォードだったが、強い決意を秘め
たその口調に押されて、溜息をついた。

「まあ、いいだろうさ。訳も分からぬ賭けはつまらんが、賭けごと
自体は嫌いじゃない」

太い笑みを浮かべたアルフォードに、ステイエラも笑った。まる
で素朴な、普通な笑顔だった。

アルフォードは思わず見とれて、思い直したように顔を引き締め
る。これで準備は出来たと言われたのであれば、後は自分のすべき
ことをやり遂げるのみだ。

通路を駆け抜け、崩れ落ちた壁から団員たちと戦う魔物の、その
巨大な後姿を見る。

「……ステイエラ。奴に貼りついている顔があつたらう、あそこな
ら楽に潰せたぞ」

狙うならばそこがいいのではないか。アルフォードの言葉に、彼
女は首を横に振った。あれの下には結局、鋼のような肌が続いてい
るだけで差異はないのだと。

そんなものかと、彼は思わず溜息をついた。ステイエラも、あの
魔物は体に蓄えている力が削られれば、日を置くなり聖者に祝福さ
れた領域ならば力を拡散させて弱体化するものだと溜息をついた。
その言葉に疑問を感じ、あの魔物は元々が、ああいったものではな
いのかと尋ねた。

「そんなんじゃないわ。あの魔物は低俗で、普段は小さい癖に人の
隙を見てはその体に潜り込むのよ。そうやって体を得て、初めて人

を食らい、殺して力を得るの」

「そうやって人間の知識や言語を吸収して強力な魔物へと変化するのだ。」

彼女の言葉に、初めて食われた人間が誰なのか、アルフォードは思い当たった。おそらくその者は自分の意に反して仲間を襲い、食らったのだろう。そう考えただけでもあの魔物に対する殺意が増した。

貫かねばなるまい、倒さなければ。スティエラがこの魔物の特性を知っているということは、おそらくは以前も同じようなことを繰り返したのだろうか。

今、ここで殺してやらなけりやな。

北門タンプリンより外へ出て、アルフォードは一人、呟いた。スティエラはそれに頷く。ここで殺す、あの化け物を。

睨み付けた先に団員たちへその腕を振り下ろす魔物、アルフォードは声を張り上げた。

「見るよ化け物オ！ 貴様を討つべくして鍛えられたこの盾、恐れを感じぬならば向かって来いッ！」

彼の言葉に振り向く魔物、しかしその傍にスティエラの姿が見えないと魔物は笑っただけだ。

あの女を伴わないと言うのなら、ここらの人間と貴様も変わりはない。それでも団長よ、残りを磨り潰してゆっくりと女の居場所を聞いてやろう。

言ってこちらを無視しようとする魔物に、アルフォードはこちらも笑い声をあげた。

「聞いたかお前ら。この魔物はどうやら矮小な人間とやりに負けるのが嫌いなようだ。この闘争を見てくれる観客を潰して逃げの算段をしているぞ」

溜息とともに投げたその言葉、仲間にも聞こえないような小さな声に、魔物は勢いよく振り返った。咆哮をあげる、距離があるというのに届くその息吹をもともせず、槍を地に突き刺してアルフォ

ードは自らの兜を取り外した。それを投げ捨てて、腕の防具、足の防具の留め金を外していく。

そんなにも怖ければ、この体を曝してやろう。それでも逃げの一手しか考えはないか。

彼の言葉にさしもの魔物も完全にこちらへ身構えた。怒りに声も低く、アルフォードは魔物を睨みつけた。

「いい加減に駄々をこねるな、名もなき者め。矮小などと人を嘲りながら、それらがなくば喋ることもできない虫けらめ。この俺が退治してくれるぞ」

ゆつくりと近づく魔物へ、怒りの矛先を向ける。

そのアルフォードを正面から、魔物は嘲笑して罵った。

「……あ、あ……そう、だな……ぞうだ……、にんげん、いなくば……ざいじょのおんあは、よが、たぞ……？」

まだをひ、ひぎざいではらをぐらえば、よ、よろこんであじをひらぐよ、う、な……きしにあるまじき、い、みだれだおんなだったなあ……」

その言葉。それを受けてアルフォードは全身から毛が逆立つのを感じた。皮膚の下で筋肉が赤々と燃えるように熱く、血潮が唸るのを耳に聞く。

これは、これは凄いいことを言ってくれたと、アルフォードは小さく零した。

「こいつは驚いた。幾つもの戦場を渡り歩いたが、敵から嘲笑や罵声に命乞いを貰っても、まさか痛み止めを貰う日が来るとは思っっちゃいなかった」

彼の言葉に、スティエラがその顔を見上げる。アルフォードは力強く頷いて、心配せずとも必ず奴の腹を貫くと、そう答える。

壁のような盾を持ち上げ、地に衝き立てた槍を抜き、姿勢も低く走り出す。

待ち構えるように、アルフォードに合わせるように低く身構えた魔物。それは大きく体を震わせ、全身を隆起させる。

「来る！」

ああ、来るな。

アルフォードは魔物からとにかく逃げるように生き残った団員たちへ命令を下し、盾に頭を当てて支える。

この初撃をかわすのだ。そこに勝機がある、アルフォードは魔物の体から吐き出された肉の槍を盾に受ける。しかし、石畳をも貫き砕くその猛撃をまともに受けられると思っではない。

盾を斜めに反らし、受けると同時に跳ね上げて肉の槍を弾く。彼は雄叫びをあげて槍を突き出した。真鍮製の特別な一撃だと逆手に持ち替え放ったそれは、肉の槍を打ち出した魔物の裂け目を正確に捉える。

しかしそれは硬く、アルフォードの一撃はその体を貫けず

「だが、他に比べりゃ軟いッ」

その言葉は自分自身を奮い立たせるために。

足を地に突き刺して、渾身の力で槍を突き出す。巨体をも弾き飛ばさんとする勢いのまま、柄頭に手を置いて更に衝く。

両者動かぬままに突き出された槍はその力に耐えることなく、大きくしなり乾いた音をたてた。その先端は折れ、槍は地に転がり、まるでそれはアルフォードの心のようにも思える。

魔物の晒う声と、迫る腕。それでも終わってなどはいなかった。スティエラの言葉を受けて、アルフォードは盾を両手に構えて再び走る。眼前の腕を転がりかわし、魔物の腹に衝き立つその槍の先端に向けて。

貫く！

打ち付けた盾からの衝撃は凄まじく、左肩と言わず腕と言わず、体の全てが悲鳴をあげた。

アルフォードはその痛みと盾より通じた確かな手応え、そして風流れる赤黒い砂に、彼は満足げに唇を歪めた。それと同時に風を切り、音が唸る。

即座に身構えて、左から来る塊へ盾を向けるも間に合わず、アル

フォードは派手に吹き飛んだ。盾の端で受けたためにスティエラとアルフォードは別々になってしまった。衝撃も吸収できずに脇腹の骨が折れたのではないかと身じろぎするたびに悲鳴をあげそうになる口を閉ざし、唇を噛み締める。

地に転がって見上げれば、瘤のついた尾を振るう魔物の姿があった。

一矢を報いたと、そう矮小なる者は言うのだろうか。

「ぞ、それではあ、むいみだ、ぞ……ああうぼおうどおお！」

醜悪な顔面から液体を零し、生臭い息を吐いて腕を振り上げる。

ここらでもう終わりかと、賭けには負けたのかと恨めしげにその腕を見上げた。それは振り下ろされる前に動きを止めた。

なにがあったのかと目を丸めるアルフォードだったが、魔物の視線と風に運ばれる声に、思わず笑う。そう、自分のすべきことは飽くまでその腹を貫くことのみ。後は全て、彼女のすべきことなのだ。地に伏した盾、その大きな盾の隙間から手を覗かせて、スティエラは這い出てきた。唇を震わせて言葉を並べ、魔物へと歩む。

「な、にを……じでいう、おんな……ぎざまあ……っ」

「走るべき皆よ、名も聞けぬ雛鳥よ、無垢なるその意思はどこまでも純粹に猛る者よ、弱者を虐げし暴者よ」

挫いた足を引きずり、魔物へ左手を差し出した。魔物はスティエラの言葉を止めるように吼えるが、それを聞くはずもなく言葉は流れる。

唸り、歯噛み、魔物はその腕を振り上げた。スティエラに向けて打ち落とされたその腕は、狙い定めた獲物に触れることすらできずに彼女の脇へと落ちる。

「一撃なら逸れる、私の作った結界だ。魔物め、あんたは暴れ過ぎたよ……！」

左手を下ろし、痛みで顔を歪め憎悪にその目を燃やす。魔物はその目を受けて、再び腕を振り上げた。

遅いと、スティエラはこちらにも右手を振り上げた。指し示すのは

アルフォードの衝き込んだ真鍮の楔。

「咆哮よ、仇敵の臓腑を食い破れッッ」

叫びと同時に両者の間で炸裂した光りは、まるで真昼のように北スマルマを照らし出した。しかしそれも一瞬のこと、弾き飛ばされたスティエラは地に伏して、魔物は体をまっすぐに立てた。

目も眩み、瞼も開かず涙を流すアルフォードは、その耳に初めて魔物と、それらに取り込まれた人間たちの声と同質のものへと変わったことに気づく。一際大きな声が響き、戻り始めた目に映ったのはその腹を吹き散らし、光りを天へと飛ばした魔物であった。

その光りこそがおそらく、スティエラの喚び出した者だったのだろう。周囲には異臭が立ち込めて、アルフォードは咳き込んだ。

魔物の襲撃に中破した北門タンブリン、そして道の町北スマルマに転がるのは、それを行つた魔物の屍である。素直には、死んでいるとも認めたくはなかったその魔物は、全身から黒い霞を吹き上げて、確かに絶命していた。

見れば吹き散らされた腹の中に、ささくれ立った槍の穂先がある。赤々と燃えたそれに触れる気など到底起こらず、呆然として魔物を見つめる団員と、同じようにしている女へアルフォードは手を差し伸べた。

しばらくは気づかなかつたが、彼の呼びかけにスティエラは弾けたように見上げる。血塗れの左手は確かにこちらに差し伸べられてはいたが、それを取るのには気が引ける。

右手を差し出そうとして初めて、自分の手も血塗れなのに気がついていた。指先の爪などは全て割れて、今は痛みを感じないがしばらくすればその苦痛に悩まされることになるだろう。

この男は、それを見て自分の左手を差し出したのだろうか。そうだとすれば、それこそが騎士たる者なのだろうかとスティエラは引きつった笑みを浮かべた。アルフォードはそれを鼻で笑い、口元を歪める。

兎にも角にも、勝つたのだ。あの魔物を相手にして勝利を収めた。

青く輝く月の下で、スティエラはお礼を言ってアルフォードの手を握った。その手を彼女の思うよりも更に強く握り返し、強引に引き立たせる。

戸惑うスティエラの首筋に、アルフォードは剣を宛てがった。

「……………え……………あつ……………」

刃とアルフォードと、それを見比べるように視線を走らせるスティエラに、彼は冷たく囁いた。魔女だったのか、そう言うのだ。

道理で帝都へ向かう目的も、魔物に勝つべくした手段も語らぬわけだ。アルフォードの言葉に、スティエラは喉を鳴らした。彼は、彼女が今までに生まれ落ちて、一度も見たことのない表情をしていた。それはとても複雑で、しかし単純な顔だった。

「伝承ぐらい知っているだろう、スティエラ・ソース。帝都に向かう魔女は誰であろうと殺す、いや魔法を使うのであればそれが誰であつたとしても、だ。それが帝国軍の最も基礎にある掟だ」

静かに語りかける。スティエラは死を覚悟したように、瞼を閉じた。しかし、間を置いた覗いたその瞳には強い意志が見て取れる。

それでも、行かなくてはならないのだ。

スティエラの言葉、アルフォードはそれを受けて意地の悪い笑みを浮かべた。

「確かに、魔法を使うのならば、それは魔女だ。しかし、奇跡の御業で我らを勝利に導いたとあらば、それは聖女とでも言うのでしよう」

そのように尊き方を貫く権限など、俺にはない。

おどけて刃を退ける。その態度の変わりようにスティエラは呆けるが、続いてこちらをからかっていたのだと気づき赤面し、声を荒げた。

しかし、である。

「いいの？ わ、私は……………」

俯くスティエラの頭に手を置いて、安心するように言葉をかけた。北門も破壊されてしばらく機能はしまい、ただ帝都に向かうのな

らば今こそが好機だろうと。その中でなにかを為すというのなら、また、許可証が必要であるが。アルフォードは地に転がった槍より、その柄に巻きついた飾りを剥いでステイエラに手渡した。

「これは天帝より授かったものだ。見れば誰もがわかる、天帝より受けた祝福の証だ。北槍の騎士より借り受けたと言え、なにをしても許してくれるさ」

こんな大事なものをと、それをいとも容易く手放す彼に驚嘆するが、すぐに笑みを浮かべて礼を述べた。一所に留まることなど到底できない身の上ではあるが、きつといつかはこの恩に報いてみせると飾りを掲げる。

アルフォードからすれば、魔物を倒してくれた女である。これがお礼のつもりではあったが、そう言うのであればわざわざ言葉を挟むこともない。下衆な下心を押し隠してアルフォードは頷いた。

別れの言葉を告げて、挫いた足を引きずり道の町を行くステイエラの後姿を見送る。そんな団長に、すっかり数も消えた団員が駆け寄った。

「いいのですか、逃がしたりして。あれは、魔女」

まあ待てと。言葉を制してアルフォードは彼らの顔を見やる。そこには生粋の騎士とやらもいれば生粋の傭兵とやらでもいるのだから。

彼は騎士ならば、恩には報いるべきだとひとつ笑い、踵を返した。穂先の折れた槍を拾い上げて、これで少しは箔もついたらうと豪快に笑った。団員たちはそれぞれ顔を見比べたが、たしかにこうして話せるのもあの女のお陰だと苦笑する。

器が広き団長に、せめてなにか我らにもお手当をを調子に乗る団員がいれば、ならば死なずにいてくれた貴様に、銅貨の一枚をくれてやるうと笑い答えるのも団員だった。

団長であるアルフォードはそれらを背中に聞きながら行き進む。異臭漂う夜風に揺れて、道の町を女の許へ。

(後書き)

いかがでしたでしょうか。やっぱり英雄と言えば色を好むのが大前提。

そしてなによりその口上。やっぱり私にはあまり才能がないようです。

英雄、北槍の騎士アルフォード・アルベインはステイエラ・ソースを帝都へと向かわせました。その判断は正しかったのでしょうか。規律、人の決めたルールを守るべきだったのか、それとも人の情に流されて下した決断こそが正しいのか。

どちらも人の判断です。問題はそれが他人の意思か自分の意思かというだけの話。アルフォードは自分の意思に従いました。

その答えを彼が知るのはいずれ先になりますが、それはまた別のお話。

ご読了、ありがとうございましたー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7432j/>

タナトアル異聞録 北槍のアルベイン

2010年10月8日15時12分発行